

【資料】**七つ星テントウムシの描き方**

宮ノ下 明大

茨城県つくば市

How to draw the seven spots of a ladybug

Akihiro MIYANOSHITA

Tsukuba, Ibaraki, Japan

摘 要

人間がどのようにテントウムシを認識し、デザインしているかを調べるために、七つ星を持つテントウムシを自由に描くアンケート調査を実施した。大学生 27 名の内、13 名は斑紋を正中線上中央に 1 個、片翅に縦に 3 個ずつ配置したデザインであった。人間がテントウムシを描くとき、七つ星をバランス良く配置するという描きやすいデザインが最も多くなると考えられた。また、バランスの良い左右対称のデザインに対して、人間は一般に静止安定を感じる事がデザインに関係しているのかも知れない。

Key words: テントウムシグッズ (ladybug-goods), 鞘翅斑紋パターン (elytral spot pattern), デザイン (design), 文化昆虫学 (cultural entomology), アンケート (questionnaire)

はじめに**テントウムシと文化昆虫学**

人間の文化と昆虫の関わり合いを研究する文化昆虫学は、1980 年代にホーグによって提唱され、様々な文化的事象が対象になっている (三橋・小西, 2014)。昆虫の中でもテントウムシは様々な商品にデザインされ、人間の文化に広く浸透した代表的な事例として知られている (桜谷, 2009; 高田, 2010; 保科, 2013)。趣味でテントウムシグッズを収集して楽しむ人も多いと思われる (桜谷, 2009)。

人間が昆虫をどのように認識しているかを知るとは、文化昆虫学の重要なテーマである。例えば、桜谷 (2009) では、テントウムシが「かわいい」と思われる理由について、体や模様が丸い、仕草がおだやか等を挙げて、人間のテントウムシに対する認識を考察している。しかし、そのデザインを分析して、人間がテントウムシをどのように認識し、デザインしているかを調べた研究はなかった。そこで著者は、テントウムシの商品デザインと、人間が自由に描いたデザインを比較して、その特徴を記載した (宮ノ下, 2015)。この中で、テントウムシの斑

紋は非常に曖昧に認識されているが、人間が描いたデザインには一定の傾向があると思われた。本資料ではこの傾向を明らかにする目的で、七つ星のテントウムシを描くアンケートを実施した。

曖昧なナナホシテントウの斑紋

日本では子供向けの学習本や図鑑に、テントウムシの代表としてナナホシテントウが掲載される機会が多く、私たちにとって最もイメージしやすいテントウムシと思われる。しかし、テントウムシを自由に描かせると、ナナホシテントウの斑紋パターンを正確に描ける人は少なく、その姿は曖昧にしか覚えていないと考えられた (宮ノ下, 2015)。

人間が描くテントウムシ

宮ノ下 (2015) は、学生 82 名に描かせたテントウムシの斑紋数は 7 個が最も多く、片翅に 3 個であることを示した。斑紋 7 個が多い理由は、ナナホシテントウの名前から「七つ星」の印象が強いからと思われる。そして七つ星を左右バランス良く描いた場合、片翅に 3 個ずつ、1 個は左右の翅の間 (正中線の上) となったと考えられた。

斑紋の頻度上位 5 パターン (図 1) は、①正中線

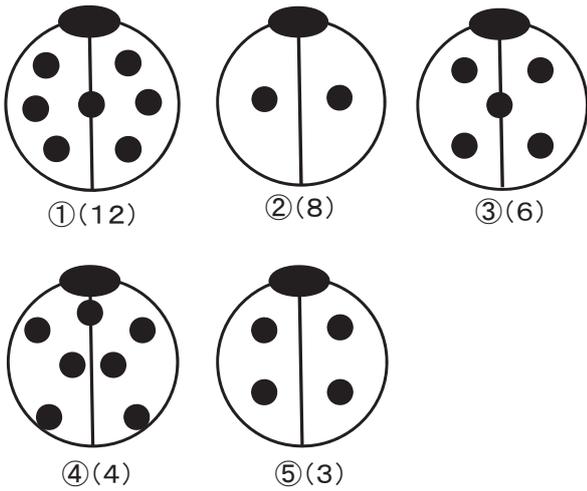


図1 学生 (n=82) が描いたテントウムシの斑紋の頻度上位5パターンと頻度 () の数字は頻度を示す (宮ノ下, 2015)

上中央に1個、片翅に縦に3個ずつ、②片翅に1個ずつ、③正中線中央に1個、片翅に縦に2個ずつ、④正中線上の上側に1個、片翅に縦に3個ずつ (ナナホシテントウの斑紋)、⑤片翅に縦に2個ずつの順だった。斑紋は2、4、5、7個であるが、いずれも左右対称でバランスのとれた配置であった。

調査方法

テントウムシの斑紋を描くとき、人間にとって描きやすいバランスのとれた配置は重要と思われた。これを確かめるため、斑紋数を7個に固定して、テントウムシの斑紋を自由に描くアンケート調査を実施した。斑紋を7個にした理由は、斑紋数7個はもっとも頻度が高いこと (宮ノ下, 2015) と、複数の斑紋がどのように配置されるかを詳しく調べたかったためである。対象は法政大学の学部3年生の27名である。斑紋の記入には頭と正中線のついたテントウムシモデルを用いた (図2; 宮ノ下, 2015)。

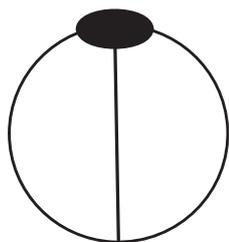


図2 学生アンケートに用いた円形の体に頭部と正中線がついたモデル (宮ノ下, 2015)

結果と考察

七つ星の描き方

大学生27名の七つ星の配置パターンと頻度を図3に示した。9種類の斑紋パターンが描かれ、1例 (図3⑨) を除き片翅に3個ずつ、1個は左右の翅の間 (正中線の上) というパターンであった。最も多かったのは、正中線上中央に1個、片翅に縦に3個ずつの配置を持ったデザイン (図3①) であり、ほぼ半分の13名が描いた。その次にナナホシテントウの斑紋デザインが多かった (図3②, 5名)。この結果は、最もバランスのとれやすく描きやすいデザインが高頻度で描かれたことを示唆している。9パターンの内、6パターン (27名中24名) は左右対称に斑紋を配置しており、大部分 (88.8%) がバランスのとれたデザインであった。

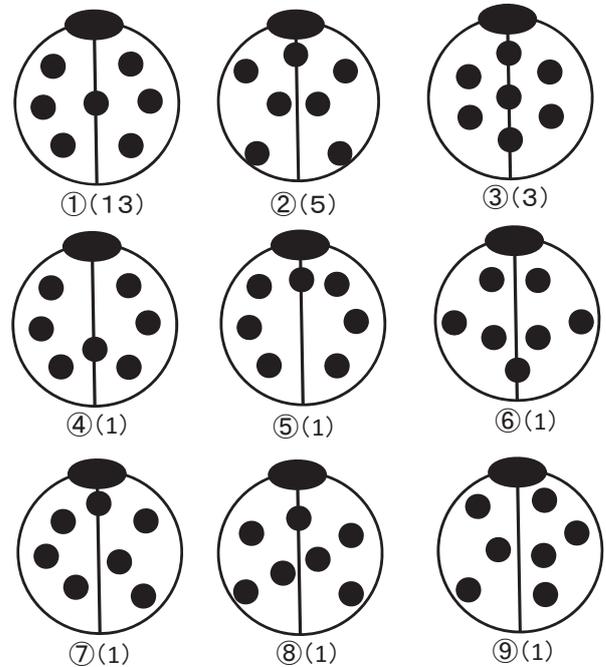


図3 学生 (n=27) が描いた七つ星のテントウムシの斑紋パターンと頻度 () の数字は頻度を示す

「七つ星バランスモデル」

私たちがテントウムシをイメージするとき、七つ星のテントウムシが浮かぶと思われる。そのモデルは、ナナホシテントウだろう。しかし、その斑紋の配置の記憶は曖昧なので、テントウムシを描く場合は、七つ星をバランス良く配置するという描きやすいデザインが最も多くなると考えられた (図4)。また、バランスの良い左右対称のデザインに対して、人間は一般に静止安定を感じる事がデザインに関

ナナホシテントウ

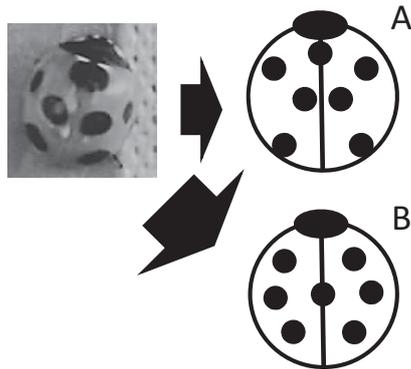


図4 人間の描く七星テントウムシデザインの傾向

実際のナナホシテントウの斑紋パターン (A) を描く人は少なく、多くの人が書きやすくバランスの取れた左右対称な斑紋パターン (B) を描いた。

係しているのかも知れない (下中, 1972)。このバランスを重視した (正中線上中央に1個、片翅に縦に3個ずつの配置を持つ) デザインを、「七つ星バランスモデル」(図4B) と呼ぶことにする。

商品のテントウムシデザイン

宮ノ下 (2015) は、商品にデザインされたテントウムシの斑紋パターンを42サンプルで調査した結果、斑紋総数7個のデザインが最も多かった。しかし、その中で「七つ星バランスモデル」は1サンプルしかなかった。一方、ナナホシテントウの斑紋パターンは3サンプルであった。厳密な「七つ星バランスモデル」は1サンプルしかなかったが、正中線上の斑紋が中央ではなく、上下にずれた斑紋パターンは複数存在した (宮ノ下, 2015)。これらを「七つ星バランスモデル」に含めて考えると、商品デザインの中でも高頻度なデザインのひとつになる。

商品デザインでは、バランスの良さではなく、独創的なデザイン、デフォルメ等が要求される場合や、シンプルなデザインを選択することもあると思われる。人間が単純に思い描いたデザインとは異なることもあるだろう。また、商品にナナホシテントウムシの斑紋パターンが描かれたデザインは、事前にナナホシテントウムシの姿を参考にした可能性が高いと思われる。今後、商品デザインと人が描いたデザイン

の差については、サンプル数を増やした調査が必要である。

「七つ星バランスモデル」の事例

茨城県つくば市のある喫茶店に、折り紙で作ったテントウムシで飾られたメニュー案内板を発見した (2015年4月25日)。手作りと思われるテントウムシのデザインは、「七つ星バランスモデル」であった (図5)。



図5 喫茶店のメニュー板に飾られた折り紙のテントウムシ

引用文献

- 1) 保科英人 (2013) アキバ系文化昆虫学～2次元世界の美少女の虫たちへの想い。426pp. 牧歌舎, 兵庫。
- 2) 三橋 淳・小西正泰 (2014) 文化昆虫学事始め。273 pp, 創森社, 東京。
- 3) 宮ノ下明大 (2015) 暮らしの中のテントウムシデザインとは何か? その図像と鞘翅斑紋パターンの特徴。都市有害生物管理 5, 61-67。
- 4) 桜谷保之 (2009) テントウムシグッズ。テントウムシの調べ方 (日本環境動物昆虫学会編)。pp. 118-121, 文教出版, 大阪。
- 5) 下中邦彦 編 (1972) シンメトリー。世界大百科事典 16, pp. 283, 平凡社, 東京。
- 6) 高田兼太 (2010) 文化甲虫学: 甲虫の文化昆虫学概説。甲虫ニュース 170: 13-18。

謝 辞

アンケート調査でご協力頂いた法政大学の佐野俊夫教授と学部生 27 名, 本原稿に有益な助言をいただいた高田兼太氏に感謝申し上げます。